

子ども環境ラボ レポート

vol.21

しらべる×つくる×かえる

～子どもの動きを見、大人の話聴く、環境づくり・環境改善～

2022年 8月 24日(土) 19:00～20:45

講師: 藤田 大輔 氏

Zoomオンライン配信 申込者 33名

キーワード 子どもの遊び 建築計画 保育環境改善 行動観察

■はじめに

しらべる: 研究—園児の行動を終日観察、アクションリサーチ的な手法も取り入れて多角的に研究している。

つくる: 設計—保育施設の設計アドバイスをしている。設計は妻と協働し、住宅、保育施設、障害者施設、宿泊施設（小学校からの改修）などを手がける。

かえる: 環境改善—保育環境の改善を目指す園に定期的に研修を行っている。

■しらべる - 園児の行動を終日観察

・保育活動時間を分析することで、活動が保育室に依存していることや待機・準備の時間が長いことがわかった。保育室機能の解体と再構築をはかり保育室以外でちゃんと遊べる環境を仕込むことが大切となると同時に「食べる—寝る—遊ぶ—身支度する」活動の場所の切り分けが求められることがわかった。

・遊びの移り変わりには空間的な余地や遊びの拠点の周辺環境の多様性も重要。

・動的、中間的、静的遊びの14の基本的な遊びが出来る場所を計画しながら、園の個性を出す遊びが出来る場所について園と確認して計画するのが大切。



■つくる - 事前調査 / 設計 / 事後調査を実施

・事前調査を行い現在の空間の使い方方を調査することで保育方針や必要な空間を調べ、設計で改善出来るところを提案。

・事後調査では食べる場所・寝る場所が分離されたことにより活動の移動時間は短縮され生活スペースが近接している空間構成が有効に活用されている実態が明らかになり、建築計画の研究の成果が実際の空間作りに反映されている。



■かえる - 事前調査 / 設計 / 事後調査を実施

園庭整備ワークショップや保育内容に伴うコーナー設定アドバイスなどでは、いままでの研究から得られた知見を園と共有し、保護者を巻き込んだワークショップや保育者に環境構成の移り変わりの報告書を出してもらうなど双方向のやり取りをすることで関わる大人の意識に子ども目線の感覚を浸透させていく。継続的な関わりにより移り変わりを可視化し関わる大人たちと共有することでよりよい空間を作り出している。



講師紹介



藤田 大輔 氏

建築計画研究者
福井工業大学環境情報学部
デザイン学科准教授

専門は子どもの遊び・生活環境のあり方、保育施設（幼稚園・保育所・認定こども園）の建築計画・設計。保育施設の建築計画のあり方について、行動観察や心理的評価から研究を重ね、保育施設の設計に活かしている（青木一実氏と協働）。また、研究の知見を活かし、保育現場で環境改善アドバイスやワークショップなども実践している。



ささば認定こども園
周辺環境大切に、北アルプスの景観を阻害しないように計画。自然素材を可能な限り取り入れて計画したこども園。子どもたちが建物の素材も含め自然に囲まれるように計画した。



寺子屋木もれ陽保育園
事後調査では食べる場所・寝る場所が分離されたことにより活動の以降時間は短縮され生活スペースが近接している空間構成が有効に活用されている実態が明らかになり、建築計画の研究の成果が実際の空間作りに反映されている。

質問コーナー

■環境を変えていく中で子どもの声を聴くなど実際にやってきたことは？→今までは設計中にはあまりやっていなかったが、現在、成長の中で年少・年中・年長の子どもの行動がどのように変わっていくか、環境の捉え方がどのように移り変わっていくのか調査研究中。園児に写真を撮ってもらって調査している。

■設計者としてソフトに関わる保育方針まで口を出し辛い。特に相手が株式会社だと会社方針と現場の保育者の違いがありもどかしいところがある。建築を作っている側からアドバイスが出来るかというのでは？→研究者がコンサルのような職能として設計者とコラボレーション出来ると良い。保育の側も認識してもらえると良いと思う。子どもの動きもわかって設計もというのは難しいと思う。

■限られたスペースの中での面積配分をどのようにしているのか？→何も考えないと四角い保育室を作ってしまうので完結させるもしくは廊下でロッカーをつくって廊下と保育室で完結させるとなるが、0,1,2歳ではそれでは上手く行かないことが多い。身支度、トイレ、着替えを中心にしなが部屋が連動するようなかたちで考えている。物理的にも開くと連結して使えるように作っている。少し狭いかなと思われるスペースには曲面をいれることで動きを促すようなこともしている。

■公園やプレイパークなど対象年齢層の幅が広い場所でのデザインやアドバイスは？→小さい子が使っても問題ないように作っていきながら、手ごたえの有無のランク分けができるかという。年齢により興味の対象は違うので子どもが選んで自由に遊びのスペースが分かると良い。

■室内に比べると園庭への意識がうすいことについては？→園庭はあまり考えていないケースが多く見受けられる。園庭は庭を作る感じで作ったほうがよい。年に数回しかない運動会のようなイベントのためでなく日々の遊びができる空間にするのがよいと思う。

■保育者は保育空間を可動家具などで作って行くが、設計者はどこまで手を入れるべきか？→保育方針に合致しているかが問題。バランスをみながら少し背伸びするぐらいで建築の環境を作って行くのが良いと思う。